

訪問での呼吸器・循環器・がん疾患の理学療法に関する実態調査

サマリー

■ 事業背景・目的

緩和ケアは、WHO の定義によると、がんに限らず呼吸器・循環器疾患の末期などを含む、生命を脅かす疾患に直面している患者のすべてに適応されるものである。本調査は、今後さらに緩和ケアのチーム医療の必要性が増すであろう、呼吸器・循環器・がんの終末期の訪問理学療法の実態を調査することを目的とした。

■ 調査方法

- 対象：会員情報データベースより抽出した訪問リハビリテーション提供施設の訪問リハビリテーション事業所、訪問看護ステーション、訪問リハビリステーション 1809 件とした。
- 調査方法：調査方法は、郵送配布・web 回収とした。
- 調査期間：平成 29 年 1 月 23 日～2 月 20 日とした。
- 調査項目：施設基本情報、訪問理学療法利用者像、呼吸器・循環器・がん疾患の重症度別人数、訪問理学療法の処方目的・処方内容・理学療法内容、訪問での問題点、呼吸器・循環器・がん疾患に対する終末期の理学療法の必要性について調査した。

■ 調査結果

- 回収率：34.8%

- 主たる病名

脳血管疾患が 38.8%、運動器疾患が 32.2%、呼吸器疾患が 3.5%、循環器疾患が 5.4%、がんが 3.1%、その他が 16.9%であった。

表：主たる病名とその割合

(単位・%)

- 主たる病名別での合併症の割合

	主たる病名	脳血管	運動器	呼吸器	循環器	がん	その他
脳血管	38.8		36.5	7.8	23.2	4.1	23.3
運動器	32.2	23.0		8.6	31.8	5.4	31.2
呼吸器	3.5	15.3	33.8		27.6	5.9	17.4
循環器	5.4	28.2	37.6	9.9		3.4	20.9
がん	3.1	15.3	32.2	15.3	17.8		19.3
その他	16.9	13.3	42.6	15.3	23.1	5.7	

■ まとめ

- 各訪問事業所での利用者の割合は、脳血管、運動器が多く、呼吸器・循環器・がんの割合はそれぞれ 10%に満たなかったが、看取りまでの関わりの割合では、脳血管 24%、運動器 17%、呼吸器 11%、がん 24%の割合であった。最重症度別の関わりでは呼吸器では Grade 4 が 23%、循環器では NYHAⅣが 3%、がんでは PS4 が 11%と、循環器での NYHAⅣでは関わりが低いことがわかった。NYHAⅣ、PS4 での関わりが低かったことについては、その要因や理学療法の必要性について今後さらに調査・検討が必要であると考ええる。
- 終末期の理学療法実施内容は、可動域維持改善、筋力増強練習に次いで、福祉用具の選定や住環境整備、ADL 指導、家族への介助指導が多かったが、合併症を考慮した理学療法内容の選択が重要であると考えられる。
- セラピスト側での問題として、リスク管理が難しいこと、急変時の判断や対応が難しいこと、また本人・家族の必要性の認識が低いことが明らかとなった。理学療法の適応の判断やリスク管理などの緩和ケアの理学療法に関するガイドラインが必要である。また、理学療法について患者や家族に説明する場合に活用できるパンフレット等が必要である。
- 今後、終末期の理学療法の必要性は高まり、がん疾患のみならず、呼吸器・循環器疾患の重症度の高い状態への関わりやリスク管理も含めた終末期の理学療法の研修会などの開催が重要であると示唆された。